

# 昭和 43 年度改訂小学校学習指導要領(音楽)に向けた文部省の取り組み

## —昭和 33 年度改訂小学校学習指導要領 (音楽) への批判との関連—

四童子 裕

(本講座大学院博士課程後期在学)

### An Approach to the Course of Study (Music) for the Elementary School in 1968 by Ministry of Education : Special Reference to the Relation to Criticism Against the Course of Study (Music) for the Elementary School in 1958

Yu SHIDOJI

The purpose of this study is to elucidate shared perspectives of problems between activities of the Ministry of Education for the revision of elementary school course of study (Music) of 1948 and preceding critical comments toward that of 1938 from Japan Teachers' Union and Association of Music Education.

From its practices from 1938 to 1947, we found that the Ministry of Education put focuses on following points; which musical instruments to teach according to students' grades, effective methods of teaching how to play them and of extending abilities of singing/playing with musical scores, and treatments of Japanese indigenous melodies in composition class. A comparison of these findings with the critical comments showed common problem awareness on "instruments" domains and solfeggio.

#### 1. はじめに

我が国の教育課程は学習指導要領によって定められ、文部省によって作成されている。一方、文部省などの教育行政がトップダウン方式で画一的な教育を指向することに反対する団体として、日本教職員組合(以下、日教組)がある。1995年に拮抗と協調のパートナーシップに基づく展開に移るまで、日教組は教育行政と対立の関係にあり、学習指導要領の改訂に対しても多くの批判を行い、音楽科編の内容に対しても、数多くの批判を行ってきた。また、1958年に組織された音楽教育の会は、音楽の専門家と現場教師によって芸術教育としての音楽教育を作ることを課題として掲げ(米沢1972, p. 105)、独自の研究や発表を行ってきた。これらの団体から、学習指導要領の音楽科編に対して数多くの批判がなされてきたが、そうした日教組や音楽教育の会からの批判と同じ問題意識を、文部省側がもって次の改訂へ向けた取り組みを行っていたのか、ということには疑問が残る。

昭和33年度小学校学習指導要領では、国際社会において信頼と尊敬を勝ち得るに値する立派な日本人の育成が目指され(文部省調査局1958, p. 2)、そのための方策として、道徳教育の徹底や、基礎学力の充実及び科学技術教育の向上を図ることを主眼としていた。そうした方針のもと音楽編では、体系的な学習や低学年の指導の改善充実、愛好曲を持たせることなどが目指された。

この昭和33年度学習指導要領から、次の改訂が行われた昭和43年度までの期間では、日教組及び音楽教育の会で「二本立て方式による音楽教育」が生み出されるなど、音楽科教育についての議論が特に活発に行われた。本稿では、この期間における日教組及び音楽教育の会による学習指導要領に対する批判がどのようなものであったのかを探ったうえで、昭和43年度の改訂に向けた文部省の取り組みについて検討し、日教組や音楽教育の会からの批判と、文部省の取り組みとに、共通の問題意識等があったのか、なかったのか、ということをはっきりとすることを目的とする。

## 2. 日教組及び音楽教育の会による昭和 33 年度学習指導要領に対する批判

日教組の資料としては、日教組の教育に関する研究会である教育研究全国集会（以下、教研）の報告書である『日本の教育』を用い、音楽教育の会の資料としては、音楽教育の会が編集・発行していた雑誌『音楽と教育』を用いて、昭和 33 年度学習指導要領音楽科編に対する批判を探る。日教組及び音楽教育の会による昭和 33 年度学習指導要領に対する批判は、以下である。

### 目標

・「美的情操を養う」ということを音楽教育に於ける 1 つの目標として掲げる構想は、「音楽的感覚の発達をはかる」という教育に於いて、後に結果として現れる 1 つの成果をも目標として掲げるという二重の誤りを導き出すことになってくる。これらのことは、技能偏重の教育やまた、旧指導要領に於いて、くどい位に強調されていた平和的・民主的教育の理念の後退とも無縁でないという意味に於いて甚だ重要である（奈良 1959, p. 2）。

### 共通教材

・共通教材について、（中略）西洋音楽に表現された日本歌曲の少なかった当時には好評を博したものとはいえ、これが果たして現在の子どもの感動をもって受け入れられるかどうかは大きな疑問がある（音楽教育の会 1959, p. 7）。

・どんな名曲であろうと、教材を固定化して無理にも押し付ける態度は、音楽教育に対する冒涇である。  
・教材の指定については、文部省の善意の措置とは見ながらも、日本各地の学校が平均した状態にないこと、それぞれ個性のある子どもが集まっていることから、これを鵜呑みにすることは危険である（音楽教育の会 1962, p. 6）。

・改訂指導要領の共通教材が、全部明治唱歌に逆戻りしてしまっ、子どもたちの心に真に共感を呼び起こすには程遠いものである。もっと子どもの生活感情に根ざした、子どもの生活に密着した子どもの生き生きとした感動そのものを歌い上げた歌が与えられなくてはならない（高原 1959, p. 8）。

### 領域

・「読譜」についての活動がほとんど「歌唱」の活動を通して、またはその中でのみ展開されるようになっているがこれでいいのか（奈良 1959, p. 4）。

・他の「鑑賞」は勿論、表現の領域に於ける「器楽」や「創作」の分野にも「読譜」という言葉或いは要素が全く見当たらない。「器楽」の高学年に「総譜に親しむ」とあるが、これは系統的な読譜活動の一環として取り上げられたものではなくて、単なる 1 つの断片として挙げられているに過ぎない。

・「器楽」教育を、新学習指導要領の要請するおりに、全国で実施することは、いろんな事情で不可能であり、それどころか、そのために、地域差、学校差を深めていくことは明らかである（日本教職員組合 1959, p. 207）。

・「器楽」領域において、多くの研究の余地を残しているのに、楽器の問題をなぜ慎重審議したのちに決定しなかったのか（日本教職員組合 1961, p. 210）。

### その他

・法的拘束力をもつだけの実質的内容が見られるかという、そうではない。22, 26 年指導要領の欠陥－日本の子どもの音楽的発達が考えられていないため、技術注入主義となった現実－については触れられないで、西洋音楽中心の考えを一層徹底させ、細かい点にまで拘束力をもたせている。文部省は、旧指導要領のどの点を反省したのか（米沢 1966, p. 7）。

## 3. 昭和 33 年から昭和 43 年における小学校音楽編に対する文部省の取り組み

### (1) 小学校教育課程研究発表大会

小学校教育課程研究発表大会は、小学校教育課程の実施に伴う指導上の諸問題を研究協議し、学習指導の改善に資する目的で、また学習指導要領の今後の改善に向けてのアドバイスという意味合いを持って実施されたものであり、昭和 37 年度から開催された。昭和 43 年度学習指導要領改訂までの小学校教育課程研究発表大会音楽部会における全国共通問題は以下のとおりである。

表1 小学校教育課程研究発表大会における全国共通問題一覧

年度	全国共通問題
昭和37年度	小学校低学年における音楽指導上の問題点についての研究 1. 音楽的感覚を伸ばすために特に鑑賞ではどのような点に重点をおいて指導したらよいか 2. 読譜の基礎能力を伸ばすためにはどのような教材を選びどのように指導したらよいか 3. 旋律楽器の学習のつまづきをどう指導したらよいか
昭和38年度	中学年における音楽指導上の問題点についての研究 1. ハ長調、ヘ長調、イ短調の視唱を含めた中学年の読譜の指導法について 2. 中学年で新しく取り扱うたて笛とアコーディオンの奏法、ならびに、これらの楽器を加えた効果的な合奏の指導法について
昭和39年度	鑑賞および器楽
昭和40年度	創作指導を効果的に行うにはどのようにしたらよいか
昭和41年度	器楽指導を効果的にすすめるにはどのようにしたらよいか—特に合奏指導における編成、選曲、編曲を中心に—
昭和42年度	聴音、読譜、記譜の指導を効果的に進めるにはどのようにしたらよいか

各年度の研究テーマ及びその発表内容は、表2～7である。

表2 昭和37年度小学校教育課程研究発表大会研究テーマ及び発表内容

テーマ	発表内容
①低学年の音楽指導上の問題について	低学年における、鑑賞指導、読譜指導、旋律楽器の指導方法
②読譜の基礎能力をのばすには、どのような教材を選び、どのように指導したらよいか	読譜の指導方法及びその実践報告
③低学年における旋律楽器（ハーモニカ）の学習のつまづきとその対策について	ハーモニカ学習のつまづきとその対策
④低学年における音楽指導上の問題点について ○絵譜と五線について ○旋律楽器のつまづきをどうするか	読譜における絵譜の位置づけ、ハーモニカ、木琴、オルガンなどの旋律楽器の実態
⑤6年間の音楽科指導記録より得たもの	音楽科の指導時間及び学習内容
⑥鑑賞を通して音楽的感覚を伸ばすには、どのように指導したらよいか—低学年を中心に—	鑑賞による児童の反応調査
⑦子どもの音楽性を高めるために、教材の研究（特に歌唱教材）をどのように進めるか	歌唱教材の分析
⑧幼年期の歌唱指導について	幼年期の児童の発声の実態及び発声指導法
⑨効果的な合奏指導は、どのようにすればよいか	歌唱曲の合奏曲への編曲方法、器楽の演奏技能を高めるには
⑩器楽クラブ活動の運営の実際とこれが他に及ぼす影響について	器楽クラブが他に及ぼす影響
⑪創作指導上の問題点についての研究	創作の導入段階における指導法
⑫創作指導の進め方について	創作指導と基礎指導の関係、聴音の学習法

昭和37年度の大会では、小学校低学年の指導をする際に留意する点について研究発表が行われ、ハーモニカ等の旋律楽器の学習や、読譜指導に関する研究が多く見られた。

①の研究では、鑑賞、読譜、旋律楽器の指導を通して、低学年では理論より感覚的な面の指導が大事であり、その中心となるものは身体反応を伴った経験の積み重ねの学習で、常に統合された内容を持つことが大切であることが述べられた。②の研究では、低学年における読譜指導の基本的態度として、感覚的直観的な指導であること、身体反応を伴った指導であること、遊びと一体となって扱うこと、音楽の基本的要素を系統づけて指導することが重要であることが示された。③と④の研究では、旋律楽器の演奏技能の個人差が大きいことが示され、指導段階を考え系統的に教材配列を行って指導していくことが大切であるとまとめられた。

表3 昭和38年度小学校教育課程研究発表大会研究テーマ及び発表内容

テーマ	発表内容
①中学年における音楽指導上の問題点について	五線への導入方法の着想及び実践報告、視唱指導の注意点

②中学年の読譜力を支える音楽能力の考察（県の実態）と今後の指導法	岐阜県の音楽能力テストの結果とその考察
③中学年の読譜指導について—読譜の抵抗をできるだけ少なくするには—	読譜における困難点、読譜の指導法
④中学年における音楽指導上の問題点	たて笛とアコーディオンの指導法
⑤第4学年におけるたて笛の指導はどのようにしたらよいか	第4学年におけるたて笛の効果的な指導法
⑥中学年における音楽指導の問題点についての研究 1. ハ長調、ヘ長調、イ短調を含めた読譜指導法について 2. たて笛とアコーディオンの奏法、ならびにこれらの楽器を加えての効果的な合奏の指導法について	1. 模唱から視唱へと切り替える指導法 2. たて笛及びアコーディオンの奏法ならびにそれらを加えた効果的な合奏の指導法
⑦中学年における鑑賞指導について	中学年における鑑賞指導の留意点
⑧児童の実感に訴える鑑賞指導は、どのような方法で行えばよいか	児童の実感に訴える鑑賞指導とは
⑨導入期における輪唱や合唱指導のこころみと考察	中学年における輪唱指導と合唱指導の実践
⑩創作の効果的な指導	創作の初歩的段階の指導法とその実践報告指導のための教具の紹介
⑪即興的、創造的表現能力を伸ばし旋律創作まで導くにはどのようにしたらよいか	即興的音楽表現能力を養う具体的指導法
⑫器楽指導を通して読譜力を伸ばすにはどのようなことに留意すればよいか—旋律楽器の読譜演奏に見られる問題点とその対策—	歌唱における読譜活動と器楽における読譜活動の実態及びその問題点

昭和38年度の大会では、小学校中学年の指導をする際に留意する点について研究発表が行われ、読譜指導に関する研究や、たて笛の指導法についての研究が多く見られた。

①の研究では、読譜の指導はまず必要感を起こさせることが大切であり、聴音と創作、歌唱、器楽を関連づけて取扱い、読譜の喜びを味わわせ、自信をもたせていくべきだという意見が示された。また、指導の重点はリズムにおき、低学年から身体的な動作を伴った活動をさせるなどして効果を上げていくべきであるとされた。③の研究では、児童が読譜について困難を感じるのには、音程やリズムが伴わないということと、どこが何の音か反射的にすぐわからないということの2点であり、音程感、リズム感を視唱にはいるまでに十分に指導しておくことが大切であることが述べられた。④、⑤、⑥の研究では、たて笛の指導法について研究が行われた。たて笛への関心と奏する意欲をどうもたせるかということや、笛の指導系統はどのようにしたらよいかという教師側からの問題点や、指使いと吹くときのタイミングが合わない、タンギングが上手にできないといった生徒側からの問題点を明らかにしたうえで、それぞれどのように指導していくべきか、ということが具体的に述べられた。

表4 昭和39年度小学校教育課程研究発表大会研究テーマ及び発表内容

テーマ	発表内容
①高学年における鑑賞指導について—日本民謡の鑑賞を中心に—	高学年における鑑賞指導の留意点
②高学年における鑑賞の効果的な指導法	児童の内面的活動を活発にする鑑賞の手立て
③高学年における鑑賞指導上の問題点について—鑑賞曲の旋律感、構成、和音感を効果的に理解させるにはどのようにすればよいか—	音楽美を感覚的、知的に理解させる鑑賞指導法
④音楽の基礎能力を高めるためのオルガン活用（特に各学年オルガン学習の指導計画について）	音楽の基礎能力を高めるオルガン学習法
⑤高学年における音楽指導上の問題点についての研究—音楽の基礎能力を高めるためにオルガンをどう活用したらよいか	オルガンと他の器楽楽器との違い及びその指導の実態
⑥音楽の基礎能力を高めるために、オルガンをどう活用したらよいか	歌唱教材をもとにしたオルガンの指導体系
⑦創作指導はどのようにしたらよいか	各領域において創造性をどのように高めたらよいか
⑧生き生きとした創作学習を進めるには、どのようにすればよいか—4年生の音楽学習—	児童の主体性を認めた創作学習
⑨小学校高学年において、音楽の基礎能力を高め、楽しい創作活動をすすめるには、どのようにしたらよいか	楽しい創作活動をするための創作以前の指導法及び創作の指導法

⑩音楽性を高めるための効果的な指導法（リズム指導について）	音楽の基礎技能を身につけさせるリズム指導例
⑪鑑賞で音楽性を高めるために教材をどのようにとり入れたらよいか	音楽性を高めるための鑑賞指導法
⑫視唱力を高め、ハーモニー感をつけるにはどうすればよいか	視唱力の実態調査及び中・高学年における視唱指導法
⑬音楽教育の一環として全校音楽をどのように指導し運営していけばよいか	全校音楽の実践報告
⑭基礎的感覚を育てるための効果的指導	低学年における音楽感覚を伸ばすための効果的指導法

昭和39年度の大会では、鑑賞指導の方法や器楽のオルガン指導法、創作について発表され、小学校高学年の指導をする際に留意する点についての研究が多く見られた。

③の研究では、鑑賞指導はよい音楽を愛好する心情を育て、美的感覚を伸ばす目的をもつものであり、効果的な鑑賞指導は感動をもととして感覚・鑑賞能力を高め、さらに表現能力とそれにとまなう音楽経験の積み重ねを基礎として行うことが大切であるとされた。鑑賞指導の方法としては、色カードを活用して主題や曲の構成をとらえたり、主題を写譜したり、旋律や曲趣（旋律・リズム・動静）の印象を音線化したりすることなどを挙げ、音楽美を感覚的・知的に理解させることを提案した。②、③の研究においては、楽曲の構成や形式、楽器の種類やその特徴をつかませるためにカードを用いるなど、教具を用いた鑑賞の指導法についての発表が多く見られた。④、⑤、⑥の研究では、オルガンの指導法について研究がされているが、どの研究においても、オルガンの設備台数が少なく児童のレベルに個人差があることが問題点として挙げられている。そのため、児童の興味を持続させるために、能力に応じたパートを与え、少しでも上手になったという喜びを味わわせるようにすることが大切であるとされた。

表5 昭和40年度小学校教育課程研究発表大会研究テーマ及び発表内容

テーマ	発表内容
①創作指導を効果的に行うにはどのようにしたらよいか	低学年におけるふしあそびによる創作指導の実践報告
②創作指導を効果的に行うにはどのようにしたらよいか（高学年） —聴音練習から創作学習へ—	創作学習を推し進めるための基礎づくり
③創作の意欲を高め基礎能力を伸ばすための指導はどのように進めたらよいか—教具の活用—	教具を活用した創作指導における基礎能力の養成法
④創作指導を段階的に取り扱うにはどのようにしたらよいか	音楽指導計画における創作の位置づけ
⑤創作指導を効果的に行うにはどのようにしたらよいか—主として上学年の指導を中心に—	創作指導上の問題点とその考察
⑥歌詞を伴った旋律創作の指導において日本旋法をどのように扱ったらよいか	日本旋法を用いた創作指導法
⑦リズム指導で、学年相応の発表的指導は、どうあったらよいか	児童のリズム感覚の実態調査及びリズム指導法
⑧音楽経験を通じて、日常生活にうおいや豊かさをもたらすための効果的な指導計画はどのようにたてたらよいか	児童の音楽経験の実態についての報告
⑨効果的な歌唱指導のための教材研究はどのようにしたらよいか —子どもの発達段階に即した教材の生かし方について—	児童の発達段階に即した音楽の統合的指導法
⑩教材（楽曲）の研究をどのように深めればよいか	教材選択上の留意点
⑪学級合奏を高めるためにはどのようにすればよいか	学級合奏を高めるための指導法
⑫児童の発達段階に応じた効果的な器楽指導	児童の発達段階に応じた器楽指導法

昭和40年度の大会では、主にふしづくりを用いた創作学習や教材論について発表された。

①の研究では、ふしづくりは遊びを通して子どもの心の中にある創造性を刺激し、創造能力を高めるためによい活動であり、高学年の聴音や記譜能力、ひいては創作活動全般の基礎になる大切な活動であるとされた。②の研究では、創作学習においては、歌問答、ふしづくりなど断片的な指導では効果はなく、累積、変化、応用、発展による系統的取扱いが必要であると述べられた。聴音練習システムによる指導→メロディーパターンによる階名模唱→和音聴音を行った後、即興表現、旋律創作を行うことがそのための手

段として挙げられた。④の研究では、「創作指導は児童の過去の音楽的な諸活動または生活の中からの諸蓄積物を系統的再編成することから出発すべきだ」と言われるようになった創作指導において、その再編成に問題があると提起し、歌唱や器楽、過去の創作活動から感覚的に身につけた楽式論的なものなどの、「音楽経験による畜産物」からの再編成をしていくことが有効であると考えが述べられた。

表6 昭和41年度小学校教育課程研究発表大会研究テーマ及び発表内容

テーマ	発表内容
①学校の実態に即した楽器の編成と編曲はどのようにしたらよいか—器楽指導を効果的にするにはどのようにすればよいか—	普通授業における合奏の際の編成・編曲
②器楽指導を効果的にすすめるために、編曲をどのようにしたらよいか—合奏指導における編曲、選曲について—	児童の創造的表現力を伸ばすための編曲の考え方
③器楽指導を効果的にすすめるにはどうしたらよいか—特に合奏指導における編成、選曲、編曲を中心に—	合奏用教材の選曲及び編曲の上で、特に留意する点について
④器楽指導を効果的にすすめるにはどのようにしたらよいか（構成、選曲、編曲）	合奏指導の編成・編曲・選曲について
⑤器楽指導を効果的にすすめるにはどうしたらよいか。特にリズム指導を中心とした合奏指導における選曲、編成、編曲について	リズム指導を中心とした合奏指導の実践報告
⑥器楽指導を効果的にすすめるにはどのようにしたらよいか。特に学級合奏における選曲、編曲、編成をどのようにしたらよいか	学級合奏の選曲についての実践報告
⑦器楽指導を効果的に進めるにはどうしたらよいか（低学年の器楽指導について）	リズム感を育て、音の高低感を感覚的につかませる低学年の器楽指導法
⑧器楽指導を効果的に進めるにはどうしたらよいか（特に編成、編曲、選曲を中心に）	器楽指導を効果的に進めるための楽器編成
⑨器楽指導を効果的にすすめるためにはどのようにしたらよいか	楽器の特色及び合奏指導の一般的な方法について
⑩器楽指導を効果的にすすめるにはどのようにしたらよいか—特に合奏の効果的な指導のすすめ方—	内面的な表現意欲を持たせる合奏指導法
⑪聴音や記譜の指導はどのようにすすめたらよいか	より効果の上がる系統的な聴音や記譜の学習指導法及び指導実態
⑫創作指導を効果的に行うにはどうしたらよいか	「創作一本道」を用いた創作指導

昭和41年度の大会では、主に器楽指導を効果的に進めていくための指導法について発表された。

①の研究は研究指定校の研究であり、楽器演奏の「編成・編曲をいかにしたらよいか」ということについて発表された。低学年、中学年、高学年それぞれの指導実践を挙げたうえで、音楽の生活化や音楽する喜びを味わわせるためにも、小編成のアンサンブルによる楽器演奏に力を入れていくべきだという結論が出された。また教師は、すべての児童が個性や能力を発揮していけるような、より音楽的に高められるような編曲を考える必要があり、編曲の力をもって子どもと共に編曲していくという態度をもつことが大切であると述べられた。⑤の研究では、教材の選曲は児童の実態に即し、確立された指導の目的にかなうものであることが必須条件であるとし、児童が素材に対してどのように取り組んでいるかその実態を押さえ、教材を選択するべきであると述べられた。しかし、児童が素材を教材化するだけでは一貫性や計画性が乏しくなるため、教師がきちんと計画を立て体系化していくことも大切であるとされた。

表7 昭和42年度小学校教育課程研究発表大会研究テーマ及び発表内容

テーマ	発表内容
①聴音・読譜・記譜の指導を効果的にすすめるにはどのようにしたらよいか	オルガンを中心とした読譜指導の進め方
②聴音・読譜・記譜の指導を効果的にすすめるにはどのようにしたらよいか—系統的、発展的な指導計画の立案とその指導法について—	聴音・読譜・記譜の指導改善のための系統表及びその指導法
③聴音・読譜・記譜の指導を効果的にすすめるにはどのようにしたらよいか—特に聴音・記譜の指導法について—	聴音と記譜との問題を関係的に捉えた聴音学習の指導法
④感じとる力をたかめるための聴音学習の一考察	音楽を感受する力を高める聴音学習とは

⑤聴音・読譜・記譜の指導を効果的にすすめるにはどのようにしたらよいか—第3学年の系統的、発展的な指導計画の立案とその指導法について—	第3学年における聴音・読譜・記譜の指導実践報告
⑥ソルフェージュ学習の一考察	読譜指導書による実践報告
⑦音楽性を高めるために鑑賞活動を効果的に取り入れた表現指導はどうあればよいか	表現指導の中で鑑賞的取扱いをどのように進めるべきか
⑧リズム感覚を伸ばすための指導はどのようにすればよいか	リズム感覚を養うための指導法
⑨創造的表現力を高めるために技術指導をどうしたらよいか	表現学習における技術指導の方法
⑩音楽の基礎能力を高めるため楽器をどう活用したらよいか—全校合奏のとり組み—	全校合奏の指導実践報告

昭和42年度の大会では、主に聴音・読譜・記譜のための指導方法について発表された。

①の研究では、読譜力とは「楽譜を読むことによって、そこに音楽としての音や内容を感じとる能力、また一定の約束によって書かれた楽譜を実際の音に表現する能力」という認識のもと、オルガンを利用した読譜指導の方法が報告された。③の研究では、歌唱・器楽などの技能を伸ばす面に指導が偏りがちで、聴音や読譜、記譜について適切な指導がなされていないことが問題視され、特に聴音と記譜との問題を関係的に捉えた指導実践報告がされた。リズム聴音、旋律聴音、和音聴音を具体的にどのように指導していくべきかが述べられ、音楽学習の毎時間、ごく短時間ずつ取扱い、積み上げていくことが必要であるとまとめられた。⑥の研究では、ソルフェージュは表現（歌唱・器楽・創作）の目標と強く結びついており、ソルフェージュ力がつけば、音楽経験は豊富になり、音楽的感覚も豊かになると実践報告がなされた。また、児童の興味を喚起しながらソルフェージュ学習ができるよう、系統的なソルフェージュ作成の必要性が述べられた。

## (2) 文部省小学校教育課程研究・実験学校

表8 文部省小学校教育課程研究・実験学校での実験課題及び研究テーマ一覧

研究期間	学校名	実験課題及び研究テーマ
昭和33年度	お茶の水女子大学文教育学部附属小学校	低学年における効果的な音楽指導
昭和34～35年度	東京学芸大学附属世田谷小学校	音楽科における統合的指導法
昭和35～36年度	横浜国立大学学芸学部附属鎌倉小学校	音楽の基本的な要素を身につけさせるための効果的な指導法
昭和36～37年度	東京学芸大学附属小金井小学校	創作の指導法
昭和37～38年度	横浜市立白幡小学校	旋律楽器のつまずきとその指導
昭和38～39年度	群馬大学学芸学部附属小学校	音楽的感覚を高める学習過程
昭和39年度	千葉県東金市立東金小学校	けん盤楽器の効果的な学習指導法
昭和40～41年度	栃木県宇都宮市立西小学校	音楽科における楽器の学年配当はどのようにしたらよいか
昭和40～41年度	岐阜県池田市立温知小学校	創作指導における日本旋法の取り扱いをどうしたらよいか
昭和40～41年度	長野県飯田市立丸山小学校	音楽指導における鑑賞教材の選曲とその学年の配当をどのようにしたらよいか
昭和42～43年度	山形市立第四小学校	創造性を開発するための音楽教育
昭和42～43年度	山梨県甲府市立湯田小学校	視唱・視奏の能力を伸ばす効果的な指導法
昭和42～43年度	滋賀県栗東町立金勝小学校	視唱・視奏の能力を伸ばす効果的な指導法の研究

横浜市立白幡小学校の研究では、旋律楽器の演奏のつまずきに対する有効な指導法が示され、まず教師が生徒のつまずきの予想や実態をよく観察し、つまずきの原因を把握することが必要であり、つまずきに対して児童の興味や効果的な反復練習を考えながら指導しなければならないとまとめられた。栃木県宇都宮市立西小学校の研究では、オルガン、木琴・鉄琴、ハーモニカ、リトミカは第1学年から、たて笛、鍵盤ハーモニカは第2学年から、アコーディオンは第3学年から、よこ笛は第5学年から扱うべきだという結論が出された。岐阜県池田市立温知小学校の研究では、音楽語彙を広め豊かにすることがよいふしづ

くりをするうえでのものとなり、即興力の感覚が音楽感覚や表現の土台であることがまとめられた。山梨県甲府市立湯田小学校の研究では、低学年においては音楽感覚を十分伸ばし、中学年では低学年で基本的な音楽感覚を把握した児童に楽譜の理解をさせ、高学年では自主的・積極的な音楽活動をとおして音楽の美しさに感動させることが大切であり、発達段階に応じた指導が重要であることが示された。滋賀県栗東町立金勝小学校の研究では、鍵盤楽器を音楽的な基礎学習のための中心的な楽器としてきたことは、視唱奏の能力の定着のみならず、有効な学習活動の展開と発展にとって著しい効果があるということがまとめられた。

#### 4. 考察

学習指導要領が改訂された昭和33年以後の小学校教育課程研究発表大会での全国共通問題のテーマとその問題を見ると、昭和37年度では低学年、昭和38年度では中学年、昭和39年度では高学年と、順を追って全ての学年が取り上げられて研究発表がなされていることがわかる。この3回の研究発表大会では、表現（歌唱・器楽・創作）と鑑賞のいずれの領域についても研究発表が行われているが、なかでも読譜指導と器楽指導についての研究が多いことが特徴として挙げられる。特に器楽指導については、低学年ではハーモニカ等の旋律楽器について、中学年ではたて笛やアコーディオンについて、高学年ではオルガンについてと、それぞれの学年で扱う楽器についてのみ重点的に研究発表が行われている。昭和40年度以後は、全国共通問題として掲げられたテーマに沿って発表をするものが多く、昭和40年度では「創作」、昭和41年度では「器楽の合奏指導の編成・編曲」、昭和42年度では「聴音・読譜・記譜」について重点的に研究発表が行われた。

この小学校教育課程研究発表大会での発表内容と、昭和33年から昭和42年の期間における、文部省小学校教育課程研究・実験学校及び研究指定校での取り組みとを照らし合わせてみると、旋律楽器の学年配当や楽器の効果的な指導法、創作指導における日本旋法の取り扱い、視唱・視奏の能力を伸ばす効果的な指導法が、どちらでもテーマとして挙げられていることがわかる。特に器楽に関しては、昭和37年度、38年度、39年度、41年度の小学校教育課程研究発表大会の全国共通問題として設定されているだけでなく、小学校教育課程研究・実験学校においても、昭和37～38年度の横浜市立白幡小学校、昭和39年度の千葉県東金市立東金小学校、昭和40～41年度の栃木県宇都宮市立西小学校で実験課題として取り上げられるなど、他の領域と比べて高い関心を向けられていることがわかった。

昭和33年度学習指導要領に対しては、器楽領域や読譜に対する批判が多く出されており、これら2つのことに関しては、文部省もそれに相対する団体も共通の問題意識があったことがわかる。特に読譜が「歌唱」以外の領域で取り扱われていない、という奈良の批判については、小学校教育課程研究発表大会において、「歌唱」領域以外での読譜指導を取り上げた発表が多く行われていることから、文部省側もそのことに対する問題意識をもって取り組んでいたのではないかと、ということが推察される。今後は、今回明らかとなった共通の問題意識がその後の学習指導要領の改訂にどう影響を与え、それがどう反映されたのか、ということを細かく見ていきたい。

#### 【引用・参考文献】

- ・波多野総一郎（1968a）「第十三回全国大会 基調報告」『音楽と教育』第96号，pp. 15-16.
- ・波多野総一郎（1968b）「新学習指導要領の問題点はどこか」『音楽と教育』第97号，pp. 2-15.
- ・真篠将編（1986）『音楽教育四十年史』東洋館出版社，pp. 413-503.
- ・文部省初等教育課編（1963）「昭和37年度小学校教育課程研究発表大会集録」『初等教育資料』157号，pp. 95-113.
- ・文部省初等教育課編（1964）「昭和38年度小学校教育課程研究発表大会集録」『初等教育資料』169号，pp. 161-198.
- ・文部省初等教育課編（1965）「昭和39年度小学校教育課程研究発表大会集録」『初等教育資料』182号，pp. 163-195.
- ・文部省初等教育課編（1966）「昭和40年度小学校教育課程研究発表大会集録」『初等教育資料』195号，pp. 195-226.



- ・文部省初等教育課編（1967）「昭和 41 年度小学校教育課程研究発表大会集録」『初等教育資料』209 号，pp. 223-253.
- ・文部省初等教育課編（1968）「昭和 42 年度小学校教育課程研究発表大会集録」『初等教育資料』222 号，pp. 171-200.
- ・奈良清利（1959）「新指導要領（音楽科）の問題点－今後の実践の為の問題提起」『音楽と教育』第 9 号，音楽教育の会，pp. 2-6.
- ・日本教職員組合編（1954～1959）『日本の教育』第 3 集～第 8 集，国土社。
- ・日本教職員組合編（1960～1967）『日本の教育』第 9 集～第 16 集，日本教職員組合他。
- ・音楽教育の会編（1959）「歌唱分科会のまとめ」『音楽と教育』12 号，pp. 5-7.
- ・音楽教育の会編（1962）「私の選んだ共通鑑賞教材」『音楽と教育』39 号，pp. 6-8.
- ・高原庄七（1959）「歌唱分科会の中で感じたこと」『音楽と教育』12 号，音楽教育の会，1959，p. 8.
- ・米沢純夫（1966）「音楽教育観の変遷」『音楽と教育』69 号，音楽教育の会，pp. 5-7.
- ・米沢純夫（1972）「『音楽教育の会』の歴史とめざすもの」『音楽教育研究』No.80，音楽之友社，pp. 103-112.